社会科部会

社会的な見方や考え方を養い、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　土井　里佳（相模原地区）

人に学び、自らのあり方を考える社会科学習を目指して

１　提案内容

単元名「くらしを支える情報」（５年）

（１）　研究テーマ・研究内容について

子どもたちが、様々な事象を「自分のこととして捉える」ようになるための授業を目指すために、身近な話題や教材を使いながら、教師からの問い続けを継続的に行う取り組み。

そのために

① 社会的なものの見方や考え方につながる資料の選び方と提示の仕方を工夫する。

② 実際にやってみる時間を設定する。

③ 自分の考え方を明確にする時間、根拠を明らかにする時間を設定する。

ことを具体的な手立てとして授業実践を進めた。

（２）　実践の概要

①　第１次　日常浴びる情報　～情報を発信する側の工夫について考える～

②　第２次　非日常での情報の出し方～東日本大震災に関わる事実から、情報を発信する側の役割や責任について考える～

③　第３次　自ら取りに行く情報　～有効な情報活用方法を知る～

「お悩みカード」を、情報ネットワーク（インターネット）を使って解決方法を考える。

（３）　成果と課題

①　情報を発信する側の使命感と行動力を学習することによって、目に見えない「情報」について考えるよい機会となった。

②　多くの資料を提示したことは、特に震災について真剣に考えるようになったが、まだ第三者的な立場のようだ。「自分に何ができるか」の考えを深めさせるための方法はないか。

③　情報ネットワークの活用という点において、インターネットの利用では、家庭による個人差が大きい中で、より有効な方法がないか。

（４）　まとめ

「自分と情報とのつながり」について、学習の４ヵ月後、文と図で表してみたところ、時間が経過していても、一人ひとりが情報に対する考え方を身につけており、学習後も更に学びが続いていると実感した。今後も継続して、現代社会の今を捉えながら、社会科の授業を創造していきたい。

２　協議内容

（１）　質疑・意見

①　新学習指導要領と関連して、情報化は、国民生活にどのように影響を及ぼしているかについて子どもたちにどのように伝えたのか。

→テレビやラジオ、携帯電話の便利さや不便さ等について子どもたちに考えさせた。

② 情報を受け取る側となりうる国民が、どのように情報を生かすのかについての指導はなされたのか。

→５年生の学習は、国語でもインターネットの授業でも取り組むことができるが、今回は、受信者というよりも発信者側の立場で学習することが多かった。

③ 「お悩みカード」で、４つの事例(教育、福祉、医療、防災)の取り上げ方は難しい。そのうちの一つをみんなで一緒に考えたらどうか。

→子どもたちが、一つのことについてそんなに情報を集めることができるのか心配だった。それよりも、広く浅くの方が取り組みやすいのではないかと考えた。

④ 最後のページの情報の選択処理能力が身についていることに感銘している。

⑤ 自分のこととして捉える考え方が身についている。

⑥ 劇を行ったとあるが、一度ビデオに撮って本物のＣＭのようにテレビで放映するなどすると、感想を述べ合ったりして、話し合い活動につながるのではないか。

⑦ 「お悩みカード」は、インターネットにこだわる必要があったのか。公共の施設で発行しているチラシや広報による情報を活用するのもよかったかもしれない。

⑧ 社会科は、自分のこととして考えることが大切。その点からすると、３次のリアルな震災のことが自分のことに考えられる内容。

⑨ 何故、ＣＭづくりにまでいくことになったのか。ＣＭづくりの必然性は何か。

→子どもたちが、ＴＶ局の仕事がよく理解できていなかったので、教師のなげかけで番組づくりのことからＣＭづくりにつなげていった。

⑩ 身近な資料から取り組むことについて、「身近に感じる」という点においては、震災でなければならなかったのか。

→事前に「町の中の情報探し」を学習して、地域の商店街などの調査する活動をした。

また、被災地からの転入児童がいて、震災の話なども協力して聞かせてくれた。

３ まとめ

（１） 助言

教材や資料の選び方、言語活動の充実につながる劇は、やや作品づくりに偏りがちになるが、製作者側として社会科の学習の中で生かされている。震災を教材としての価値付けとするには、社会科のねらいを達成するためのものでなければならない。

その中で提案者は、被災地からの転入児童への配慮、著作権に伴う配慮をきちんと行っている。子どもたちは、「指導と評価の一体化」の点から、「指導する→評価する→評価を生かす」ということを、１年間→６年間→小中９年間のスパンでの目標の準拠を考えていく必要性がある。

そのために、子どもたちにつけたい力だけでなく、教師もどのようにしていくかが大事。

情報については、現在、誰もが発信できる状況になってきている(ＹＯＵＴＵＢＥなど)、大人も子どもも同じネットワークの中でどのように関わっていくかが大事になる。

そして、情報教育、防災教育なども横断的に合わせていくか、どう社会科の学習につなげていくかが、今後の課題である。

提案２　　提案者　鈴木　和己（中地区）

＜研究主題＞
社会的な見方や考え方を養い、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う学習指導と評価の工夫・改善

１　提案内容

単元名「戦争から平和へ」（６年）

（１）研究テーマ・研究内容について

①　単元について

児童の祖父母の戦争体験談をもとに学習を進めていきたいと考えていたが、予想より戦争体験者が少なく、十分に話を聞けなかったため、教科書に合わせて授業を進めていった。

教科書掲載の「どんぐりと戦争」については、隣の平塚市の様子から、当時の人々の生活や暮らしの変化について考え、伊勢原市はどうだったのかということに考えを広げた。また、「青い眼の人形」については、市内の小学校に残る「ルース・ジェン」を借り、自分たちの地域も戦争に巻き込まれていたことへの考えを深めていった。

児童が話し合う上での根拠となるような資料や身近な資料をなるべく多く集めることが必要であると考え、退職女性教職員がまとめた『戦争を語り継ぐ』ための資料や絵も参考にし、イメージとしてとらえやすくしたり、伊勢原市や近隣の市の様子を伝えるようにしたりした。実際に戦争の体験をした地域の方（学区の見守り隊の方）の話を聞く機会も設け、授業で学習した内容だけではなく、実際の声から戦争に対する考えを持てるようにした。満州からの引き揚げの話は、戦後の学習にもつながった。

②　評価の工夫について

戦争というものがどのように子どもたちに影響していったのか。さまざまな時代背景や戦時中の子どもたちの様子等を知ることにより、当時の子どもたちにどれだけ寄り添った考え方ができ、かつ自分なりの考え方が持てているかを記述させた。多くの児童が当時の背景や人形について自分なりの考えを記述することができていた。その中でも、資料をもとにするなどして考えの根拠となる部分を特にしっかり記述できている児童について、Ａ評価とした。

テーマに迫るために、記述で自分の考えを持ち、そこから小グループやクラスでの話し合いをしながら意見を深めていった。意見交流をすることによって、個で考えるだけでは養えない社会的な見方や考え方を得られたのではないかと考えた。

（２）　まとめ

児童が戦争体験をインタビューする相手がいなかったため、教科書を中心に進めていくしかなかったが、この地域にある題材をいくつか取り入れ、伊勢原市や近くの地域で実際に起こった出来事という手立てを与えることで、より地元意識を感じながら学習に意欲的に参加することができた。小学校にある「青い目の人形」を通して、自分たちの地域も戦争という時代に巻き込まれていたことへの考えを深められた。地域を取り上げ、その時代の伊勢原はどうだったのかという疑問を持たせ、そこから日本全体の歴史、戦争という時代の流れの中で、社会的な見方や考え方を養うきっかけができた。

言語活動の充実が重要であるといわれる中、どのように「考えたことを表現する」活動を取り入れたらよいか、また表現されたことを授業にどう生かしていくかが今後の課題である。

2　協議内容

（1）協議の柱：言語活動の充実を図る学習指導と評価の工夫（身近な教材を通して）

①　記述させたことを表現させているとのことだが、書けない児童にはどう指導していったか。
→罫線ではなく枠のみの用紙を使い、大きな字で少しだけでもいいのでとにかく書かせることから始めた。個人で考えて書く時間、小グループの意見交換、全体で発表という流れで取り組んだ。全体の発表では他の子の意見を言うことも認め、発表しやすい雰囲気を作った。継続的に取り組み、全員が何かしら書けるようになっていた。

②　身近な教材を探すことは高学年の学習内容では難しいが。
→子どもに関わってくるもの、子どもがわかるものを探すのが大事。地域により差もあるが、市や地域で協力して教材を開発していく。戦争体験については、今後は実体験として聞くことができない時代になる。地域の方の戦争体験や戦時中の生活の様子などを扱うためには、地域素材として教材化していく必要がある。

③　身近な方の体験談はどのように扱ったか。
→登下校を見てくださるボランティアの方に、満州にいたときの話をしていただいた。あくまで一体験ということを押さえる必要がある。個人の体験なので扱いが難しい面もある。

④　どの資料を提示するか、絞るか、難しい面があるのではないか。
→１時間に３つの資料を提示したことがあったが、深く触れられずに終わってしまい次時に改めて扱った。使う資料を厳選することも大事である。

⑤　戦後の学習はどのように展開したか。
→北方領土や沖縄の問題についての学習に進み、地域とからめた学習ができなかった。地域の教材が見つからなかった。

3　まとめ

（1）　助言

①　真摯で丁寧、緻密な研究であり、指導者として学ぶべき点が多い提案であった。

②　児童の変容は教材にあたったときからの変化を見取るのではなく、単元を通しての変化をおさえることが大事である。１時間の捉えだけではなく全体を見据えて取り組む必要がある。指導と評価の一体化という意味からもその視点を大切にしてほしい。

③　「本時目標」の大切さを考える必要がある。この時間で何を捉えさせたいのか、何を考えさせたいのか、具体化しはっきり子どもたちに示す必要がある。

④　地域素材を用いることは、地域の良さを知り地域を愛する気持ちを育てることにつながるが、扱いが難しい面がある。児童にとっての「身近さ」とは何なのか、学年に応じて検討する必要がある。学習指導要領に基づいていることはもちろん、子どもの考えを引き出せる教材となっているのかどうか吟味するべきである。

⑤　戦争体験については１００人いれば１００人の体験がある。あくまで個人の体験であり、一般的なものではないということを教師がとらえておけばよい。

⑥　単元計画の「学習のねらい」「学習活動」「展開」「評価」、それぞれの内容を吟味し整理する必要がある。「調べる」という活動は「学習のねらい」なのか。指導と評価の一体化という視点で指導案を検討してほしい。